

それは、ソーラン節から始まつた



映画には今の中学生も出演した。クライマックスシーンで南中ソーランを踊る新三年生たち

「稚内発『学び座』」
ソーランの歌が聞こえる
(JTAキネマ東京製作)
モデルになつた稚内市

稚内市で「田、市内の中学校で実際に起きた出来事をもとに作られた二本の映画の試写会がある。テーマは、学校の薦めと再生。製作に学校側が全面協力し、かつての「きず」をさらけだした。そのお札を込めた、全国ロードショーに先立つ試写会だ。映画を撮った斎藤耕一監督は「勇氣のわく映画だ。悩んでいる全国の学校関係者に見てもらいたい」と話している。

荒れた学校、再
発内稚へ國全



朝日新聞北海道支社
札幌市中央区北2条西1丁目1番地
電話011-281-2131 〒060-8600
©朝日新聞東京本社 1996

南中学校の試み 映画化 生

義澄校長、生徒四百七十九人)は一九八〇年代、多い年には年間五十人の生徒が警察に補導された。稚内署の資料によると、喫煙、シンナー、万引き、傷害事件など様々な事件が頻発した。市民から「日本一悪い学校」と陰口をたたかれたこともあったという。

八〇年代に同校で学年部長をし現在、宗谷支庁豊富町立豊富中学校の二浦東興校長は「南中の校区は漁業関係者が多い。二百戸施行による水産業の衰退で親が失業したり、留守家庭が多く、親子で心がすさんでいた」と振り返る。

荒れが頂点を迎えた八五年、南中再生は子供だけの問題ではない、と学校と父母が協力して様々な取り組みが始まつた。土台は文化活動からと、地域に眠っていたニシン沖揚げ音頭の保存会の長老に歌と踊りの指導を仰いだのが、ソーラン節との出あいだった。

最初はゆったりとした正調

かった。そんな時、ロックビートの速いテンポでリズミカルな民謡歌手伊藤多喜雄さんの「ソーラン節」を教師が知り、テープを生徒に聞かせるとがぜん興味を示した。

映画はこの経過を一人の女子中学生の目でたどる。主演は安達祐実で、校長役は田村高廣。現在の生徒たちも各所に出演している。「旅の重さ」や「望郷」「津軽じよんがら節」の斎藤耕一監督がこの話を聞き、映画化を思い立った。「最初は本当かと思つたが、足を運んで確かめ、再び取り組んだ地域ぐるみの力に感動した。かつて悪い学校だったことをさらけだして協力してくれた学校の勇氣にも敬意を表したい」と話す。

学校側も撮影協力あり現地で試写会